第13課　ローマへの旅

【暗唱聖句】

「パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ」使徒27：24

【今週のテーマ】

パウロはローマを訪問したいと長らく願ってきましたが、彼が望んでいた形ではないにしろ、それが実現することになります。ローマへ向かい途中で起こった様々な出来事を交えて学びます。

【日曜日・ローマへの航海】

カイサリアでの2年間の監禁のあと、パウロはローマに送られることになりました。ルカとアリスタルコというクリスチャンも同行したようです。また百人隊長ユリウスが囚人たちを監視するために同行しました。彼らが出発したのは夏の終わりでしたが、船旅は強風のために難航し、クレタ島の陰を航行しながらようやくラサヤの町に近い「良い港」と呼ばれる所に着いたときには、既に断食日（10月後半）も過ぎていたので、これからの航海は非常に危険でした。そのため通常地中海の船旅は11月から3月までは避けられていました。パウロは「この航海は積み荷や船体ばかりでなく、わたしたち自身にも危険と多大の損失をもたらすことになります」（使徒27：10）と警告しますが、ユリウスはパウロの言葉よりも船長や船主の言葉を信用し、さらに航海を続けてフェニクスまで行って、そこで冬を過ごそうと考えました。フェニクスのほうが冬を安全に過ごすことができたからです。ところが天候が急変し彼らの船は流され、目的地からどんどん遠ざかってしまったのでした。さらに酷い暴風に悩まされ、結局沈没しないために重い積荷や船具を海に捨てざるを得ませんでした。そして、「幾日もの間、太陽も星も見えず、暴風が激しく吹きすさぶので、ついに助かる望みは全く消えうせようとしていました」（使徒27：20）。

　しかし、このことも神様が生きておられるということを証するために用いられていくことになるのでした。パウロは立ち上がり、人々に語り始めます。

「皆さん、わたしの言ったとおりに、クレタ島から船出していなければ、こんな危険や損失を避けられたにちがいありません。しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。船は失うが、皆さんのうちだれ一人として命を失う者はないのです」使徒27：21，22

人々を励ますパウロの姿は、みじめな囚人の姿などではありませんでした。神様から遣わされた使徒として、神様を証するためにそこに立っているのでした。「なぜパウロは誰一人命を失う者はいない」と言えたのでしょうか。パウロはこう続けます。

「わたしが仕え、礼拝している神からの天使が昨夜わたしのそばに立って、こう言われました。『パウロ、恐れるな。あなたは皇帝の前に出頭しなければならない。神は、一緒に航海しているすべての者を、あなたに任せてくださったのだ。』 ですから、皆さん、元気を出しなさい。わたしは神を信じています。わたしに告げられたことは、そのとおりになります」使徒27：23～２５

神様は直接天使を遣わし、このことを告げたのでした。神様を信じるとき、わたしたちもこのような力強い証を立てることができるようになります。そして、自分だけでなく他者をも励まし、元気づけることができるようになります。

【月曜日・難破】

パウロが神様からの言葉を語ってから14日目に陸地に近づいたのがわかりました。パウロは人々に体力をつけるために食事をとるようにすすめます。そして、パウロは「あなたがたの頭から髪の毛一本もなくなることはありません」（使徒27：34）と再び彼らを励ますのでした。37節を見ると、全部で二百七十六人もの人が乗船していたことがわかります。このような大勢の者たちを前に、嵐の只中にあって神様は栄光を現してくださいました。このことを考えると、わたしたちも多くの困難の只中にあって、神様はその栄光を現わしてくださることがわかります。特に、最近の多発する自然災害を前に、神様の栄光を証する機会としてとらえることができるのかもしれません。

　この一連の出来事において、最もパウロを信頼するようになったのは百人隊長のユリウスでした。船が座礁した後、兵士たちは囚人たちが逃げないように殺してしまおうと提案すると、ユリウスはパウロが巻き添えにされることを恐れてそれを認めなかったことからもわかります。またこの嵐の只中にあって、神様に委ねる信仰とわたしたちがすべきことの努力との間の良いバランスが大切であることがわかります。何もしないで神様の救いを待っているだけではなく、このケースでは積荷をおろしたり、水深を図ったりなどを行いながら、救いを待ったのでした。

【火曜日・マルタ島で】

パウロたちの船は嵐によって、出航した港から実に760キロも進んだ地中海の中央にあるマルタと呼ばれる小さな島に漂着します。彼らはそこで冬が過ぎるまで3か月待たなければなりませんでした。マルタ島の住人はとても親切にしてくれましたが、そこである出来事が起こります。パウロが一束の枯れ枝を集めて火にくべると、なんとそこに一匹のマムシがいてパウロの手に絡みついたのです。住民たちは「パウロがきっと人殺しにちがいない。海では助かったが、『正義の女神』はこの人を生かしておかないのだ」（使徒28：4）と互いに言い合います。パウロが囚人として囚われの身であったことから、住民たちはパウロの身を案ずるのではなく、このように言い合ったのでしょう。「ところが、パウロはその生き物を火の中に振り落とし、何の害も受けなかった」（使徒28：5）のです。これにはさすがに住民たちは驚いて、今度は、「この人は神様だ」と言う始末でした。キリストが約束された言葉を思い出します。

「手で蛇をつかみ、また、毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば治る。」マルコ16：18

このような機会を通して神様はマルタ島の人々に栄光を現されました。さらにマルタ島の人々を驚かせる出来事が続きます。それは島の長官でプブリウスという人の家で三日間手厚くもてなされた際に、プブリウスの父親が熱病と下痢で床についていたので、パウロはその家に行って祈り手を置いていやしたのです。その噂はすぐに島中に広がり、島のほかの病人たちもやって来てパウロにいやしてもらったのでした。このように、まるで嵐にあって流れ着いた先が小さなマルタ島であったのは、この島の人々に神様の栄光を現わし、救いへと導くためであったのかもしれません。バプテスマ数が記載されているわけではありませんが、神様の栄光を現わすというのは、数字的な結果としては現わされない場合も多いのです。いずれにせよ、小さな島でも神様から見捨てられることはないのだと知ることができます。

【水曜日・パウロ、ついにローマへ】

マルタ島での3か月の後、一行はプテオリに到着します。その知らせを聞いた信者の一団がパウロを歓迎するために、数十キロ南まで下ってきます。ローマに入ったとき、パウロは番兵を一人つけられましたが、自分だけで住むことを許されます。このような寛大な処置を受けた背景には、総督フェストゥスからローマ法によればパウロに死罪に相当するような罪状は見当たらないという報告が届いていたからでしょう。

パウロは主だったユダヤ人たちを招き、これまでの事情を説明します。そして「イスラエルが希望していることのために、わたしはこのように鎖でつながれているのです」と語ります。イスラエルが希望していることとは何でしょうか。それはメシアの出現でありましょう。そのことをパウロは伝えようとしているのだと言っているわけです。そのことについて興味をひかれないユダヤ人はいないことでしょう。パウロはこれまで様々な場所で語ってきたように、ローマでもまず同胞のユダヤ人たちを相手に、イスラエルの希望であるメシアは現れたのだ、それはイエス・キリストだったのだということを話し始めます。

【木曜日・福音の勝利】

パウロが改めて話しをする日にちが設定され、その日大勢のユダヤ人たちが聞きにやってきました。パウロは、朝から晩まで説明を続け、神の国について力強く証ししました。モーセの律法や預言者の書からイエス・キリストについて預言されていたことを説明しました。その結果、ある者はパウロの言うことを受け入れましたが、他の者は信じようとはしませんでした。すると、パウロはイザヤ6：9，10を引用します。

「あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心で理解せず、立ち帰らない。わたしは彼らをいやさない」使徒28：26，27

パウロはどうしてわからないのかという気持ちだったのでしょう。最後には「だから、このことを知っていただきたい。この神の救いは異邦人に向けられました。彼らこそ、これに聞き従うのです。」（使徒28：28）と言うほかありませんでした。その後のことについては、「パウロは、自費で借りた家に丸二年間住んで、訪問する者はだれかれとなく歓迎し、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた」（使徒28：30、31）というところで使徒言行録は終わっています。結局のところ、自分から求めてくる者たちにこそ、福音の真理は伝わっていくのです。また、まだ続きがあるかのような余韻のある終わり方ですが、この続きはその後の世界中の教会が担っているということです。